

G・ジュネットの詩的言語理論

——言語模倣説とその二律背反——

神 郡 悦 子

ジェラルド・ジュネットの『ミモロジック』は言語の有縁性についてのさまざまな議論を（歴史的に）たどった著作であり、これによって提起される言語の有縁性そのものの今日的な見直しの問題については、以前に考察したことがある¹⁾。本論文ではこの著作のもう一つの側面である、そしてジュネットが彼の批評的経歴の中できわめて早くから問題としてきた、詩的言語における有縁性の問題について考察することにした。

詩的言語の有縁性の理論とは、ごく簡単に言えば、通常の言語にはない有縁性を詩（的言語）によって回復するという考え方のことであり、ジュネットによれば、これはノディエにその予示がみられるものの、十九世紀後半の象徴主義の言語理論においてはじめて明確な形をとってあらわれるものである。そしてこの考え方は今日の我々の詩的（文学的）言語観に深い影響を残していると考えられる。

『ミモロジック』の第12章「言語の欠陥に対して」は、象徴主義以降の詩的言語理論と言語模倣説のかかわりを、こうした観点から詳細に検討している。ジュネットは、この詩による有縁性の回復の考え方が、マラルメによって、詩人としてのみずからの存在を賭けた信念として強烈に打ち出され、それが以後詩的言語理論の決定的なテーゼの一つとなり、ヴァレリー、ヤーコブソンらへと受け継がれて行くという一種の系譜を、鮮やかに論証してみせた。ジュネットの功績はまず、この系譜の存在そのものを指摘したことにあると言える。これは言語模倣説を鍵にした、詩的言語についての思考の歴史ないし変遷の見事な読み直しであり、同時に我々の詩的言語観がロマン派および象徴派から受け継いだものの一つの新たな検証である。一方逆に、詩的言語理論におけるミモロジスムそのものの（内的な）特殊性はそれほど考慮の対象とされていないと言えるのだが、それよりもジュネットが最大の関心をはらうのは、ミモロジス

ムの考え方が詩的言語理論の中で（ほとんど不可避免的に）生じさせる矛盾・二律背反である。ジュネットはこの矛盾のあり様を見きわめることによって、我々自身の詩的言語の認識の根底を探ろうとしているように思われる。

以下に我々は、まずジュネットが明らかにしてみせた詩的言語模倣説の系譜をたどりながら、ミモロジスムの生得的な（？）特徴と思われるそれにまつわるさまざまな二律背反を明らかにすることによって、我々自身の詩的言語の発想において有縁性がいかにすれば可能であるのか、また有縁性の概念をもち込むことによっていかなる可能性が切り開かれるのかを考察してみたい。さらにその上で、詩的言語模倣説の考え方がジュネットの文学的考察の経歴の中で、常に二律背反を生じさせながら一つの鍵概念として機能してきたことを検証し、この概念が文学の領域においていかなる問題を提起するものであるのかを考える契機としたい。

I

『ミモロジック』においてジュネットが明らかにしたことの一つは、言語模倣説（ないしクラテュロス主義）の歴史において、純粋なミモロジスト（言語は事実として模倣的であり、また模倣的であるべきであり、もちろん模倣的であり得ると考える論者、その代表がクラテュロス）は、きわめて稀にしか現われないということである。ジュネットは、歴史上ミモロジスムは、実はほとんど常に彼が第二次ミモロジスムと呼ぶところの立場となって出現していること——そして（『クラテュロス』における）ソクラテスがすでにこの立場にあったこと——を明確にした。第二次ミモロジスム（ジュネットはこれをネオ=クラテュロス主義とも言う）とは、《言語が事実として模倣的である》ということは否認するが、《模倣的であるべき》であると（さらにはまた《模倣的であり得る》と）考える立場を言う。歴史上のミモロジスムの現われを振り返って見れば、ミモロジスムとはまず何よりもこの「第二次ミモロジスム」を意味する。そしてそれは言語の恣意性を基礎的な科学的真実として受け入れている今日の我々にとっては、なおさらである。したがって「第二次ミモロジスム」こそは我々にとって第一義的な、つまりは真のミモロジスムであると考えられる。ジュネットは歴史上稀な、純粋な（第一次の）ミモロジストであるクルール・ド・ジェブランについて「なにものにも妨げられない幸福なミモロジストのイメージそのもの」²⁾とその例外性を強調するばかりでなく、彼の立場を「この全的

なクラテュロス主義ないしは過剰クラテュロス主義⁸⁾とも呼んでいた。

したがって我々にとってミモロジスムとは、本来、事実認識と願望の（あるいは欲望の、夢想の）^{アンジグアレンス}二律背反を内含するものである。ミモロジスムのさまざまな変異は、まさにこの二律背反の多様な形態であり、ミモロジスムが言語^{ヴァリアーション}についての豊饒な夢想として、常に形を変えつつ、すでに三千年にわたって活力を保ってきた秘密も、この、事実（知性）と願望（欲望）の拮抗にあると言えるだろう。

ではまずこの二律背反を第12章「言語の欠陥に対して」で最初に採り上げられているマラルメについて見てみよう。マラルメの場合に特徴的なのは言語の模倣性が、人間にとって禁じられたもの、到達し得ぬ不可能性として強調されている点である。マラルメは「自分が知っているとおりの唯一の名づけ方によって口にされれば、事物はひとりでに浮かび上がってくる」と考える「愛国者たち」を、「そんなおかしなことがあるだろうか」⁹⁾と退ける。『詩の危機』のあの有名な一節では、「ことばは対象をそれに見合った色合いや調子をもつ筆づかいで表現し得ていない」⁵⁾ことに対して遺憾を表明している。重要なのはこの遺憾の念である。マラルメの詩学はこの不自由さの感覚をばねとする。マラルメの（やや）幸福な言語的夢想の書物は、自分の言語に関する模倣性の禁忌の念の裏返しとして英語を対象としているのであるし、その『英語の単語』において彼は、「文字の絶対的な意味作用」、すなわちb, p, f, g, i…などの音の象徴的価値を記述することはあっても、なぜその音がそうした価値をもつかについては説明しない。マラルメにとって言語の模倣能力は、説明し得ぬ神秘であり（であらねばならず）、それはまさしく達し得ぬそして達してはならぬユートピアである（「世界というスペクトルとそれらを表現する責を負う言葉とのあいだの」絆は「言語の神聖な、しかしもしかすると危険な神秘の一つ」⁶⁾である）。

ジュネットはこの章において、マラルメを近代的詩的言語理論における（第二次）ミモロジスムの導入者およびその確立者として位置づけているわけだが、この著作（というかミモロジスムの歴史）全体を通じて見ても、彼は中心的存在である。すなわちその強烈な禁忌の感覚と激しい欲望とにおいて、マラルメは第二次ミモロジスムの最も尖鋭なる体现者であり、まさに「十全な意味での」クラテュロス主義者なのである（もう一人の模範的な第二次ミモロジストであるソクラテスは、マラルメに比べれば、願望において温和で、可能性においては完全に悲観的なミモロジストであった）。

禁忌の念に裏づけられた「詩は言語の欠陥を補う」というマラルメのテーゼは、以後の詩論にとって不可避的なトポスとなるが、我々にとって重要であるのはそれが現代の詩的言語理論の中でどのように位置づけられるかである。別の言い方をすれば、ミモロジスムの考え方が我々の詩的言語の中のほかの考え方とどのように対立した結びつくかこそ、「ヘルモゲネスの時代」にある我々にとっては重要な関心事なのである。言語の恣意性への（知的な）信頼と有縁性の（感覚的・直感的な）確信との拮抗は、とりわけヴァレリーとヤコブソンにおいて顕著に見出される。

ヴァレリーは「詩は音と意味のあいだのいつまでもつづくためらいである」という有名な定式によって詩的ミモロジスムの旗手となっているが、一方では完全なヘルモゲネス主義者の姿を見せる。言語が恣意的であることを彼は事実として認め（「各々の語はある音とある意味とを瞬間的に接合したものであり、それらのあいだにはいかなる関係もない」）、言語の模倣性の可能性を否定し（「我々のもつ諸々の観念と個々にそれを指す音のグループとのつながりが完全に恣意的でないような、言い換えればまったくの偶然でないような事例など、ほとんど一つもない」）さらに言語の恣意性・慣習性を称賛している（「脚韻は、素朴にも何か慣習以上に重要なものが存在すると信じる単純な人々を怒りに駆り立てるといふ大成功をおさめている」「最大の進歩がなされたのは慣習的記号があらわれた日である」⁷⁾）。この二つの立場の矛盾はたしかに、詩を「言語の中の言語」と位置づけ、日常言語と詩的言語の二分法を確立したヴァレリーにあっては、詩的言語の有縁性と対立する日常言語の恣意性として整理できるものかもしれない。しかし詩的言語の特性に限ってみても、やはり互いに矛盾する、そしていずれも根源的に重要な、二つの主張が見出される。ジュネットによればそれはどちらも詩的テキストの破壊不可能性（ないし翻訳不可能性）という大命題の変奏であるのだが、その第一が形式の自律性ないし「自動詞性」であり、第二がさきほどの音と意味の不分離性である。形式の「自動詞性」とは無論意味に対する形式の自律性のことであり、ここでは形式の有する意味は付随的・非関与的、あるいは多重的・曖昧であると、さらには形式は無意味であると主張され、こうして意味は詩的言語においてまったく捨象されるかに見える。しかし第二の考え方においては、詩は「〈声〉と〈思考〉のあいだを揺れる」「振り子」であり、「一篇の詩の価値は音と意味の不分離性にある」と結論され、音と意味のつながりが回復される。

ヴァレリーにおいてはこの二つの立場すなわち形式主義詩学とネオ＝クラテ

ユロス主義詩学は、いわば別個に併存しているだけであるが、ヤーコブソンにおいては、この二つの原理を並立させるための認識上のより複雑なトリックを読み取ることができる。

ヤーコブソンそしてロシア・フォルマリストの主張する詩的言語の最大の特徴は、(ヴァレリーにも見られたような)形式の自律性ないし「不透明性」である。そしてヤーコブソンが言語の詩的機能を「メッセージそのものにおかれた強調」と定義したことは周知のとおりである。もちろんこの考え方は詩的言語の恣意性に直結している(「この機能は記号の触知性を高めることによって記号と対象とのあいだの根本的な二分関係を深化する」)⁸⁾。しかしまた一方でヤーコブソンは言語の有縁性の最も熱烈な擁護者であり、とりわけ詩的言語における模倣性の役割を随所で強調している(「詩は音の象徴性とその効果を感じさせる唯一の領域だというのではないが、潜在的であった音と意味とのつながりが明示的になり、最も明白にまた最も強烈にあらわれる領域なのである」。「音韻対立の図像的な自律的価値は、純粹に認知的なメッセージでは弱められるが、詩的言語においてはとりわけ顕著となる」)⁹⁾。ヤーコブソンにおいては、ともかくこの二つのあいだ対立する特性はどちらも異化作用(ostranenie)の一手段として、二つながらに詩的テキストの知覚可能性に貢献するもののみ考えられているようである。

ついでに、ここで明らかとなるもう一つの二律背反について述べておこう。それは知覚可能性と模倣性との関係にかかわる二律背反である。「ドミナント」についての論文の中では、模倣性が大きいとそれだけ知覚可能性は小さくなるとされている¹⁰⁾。ところが論文「新しいロシアの詩」においては次のように逆の主張がなされている。「情意言語と詩的言語においてはことばによる表象(音声的・意味的な)は、それ自身により大きな注意をひきつけ、音的側面と意味作用とのあいだのつながりが狭められる」¹¹⁾。

ところでさきの詩的言語の二つの特性(形式の自律性と有縁性)は、ヤーコブソンの最も生産的でまた魅力的な主張である「反復の原理」(等価性の原理)において奇妙な融合をみせる。ジュネットによる卓抜なヤーコブソン詩学のまとめによれば、「シニフィアン(音声、律動、文法、抑揚、韻律法)の等価性の水平的な網目が、一連の(垂直的な)意味的等価性——個々の形式と個々の意味との等価性(映像)、あるいは複数の形式が形作るグループと複数の意味が形作るグループとの等価性(図表)——を通じて、シニフィエの等価性というもう一つの水平的な網目に投影される」¹²⁾。

ここにはジュネットの言うように、等価性という語によるトリックがある。等価性とはももとは「連鎖の中で同一の位置を占めることのできるすべての辞項が取り結ぶ関係」を指していた。つまりそれは範列的な等価性を指し、「類似性および非類似性、同義性および反義性」を等しく包括していた。それが意味的な等価性にすり替えられ、等価性は、一般にそう見做されているとおり、類似性を指すようになる。しかしこれは実はそれほど重大な問題ではないと我々には思われる。むしろ等価性と類似性を安易に混同することは嚴重に慎しまねばならないが、ジュネットの採り上げた例（ヤコブソンは等価性を説明するために、欠如文を埋める範列的な語彙の中から、無意識に意味的類似を有する語ばかりを選び取っている）は、ヤコブソンがわかりやすさを狙うがあまりに犯した過失だと言うことができる。そして詩的言語の特性に関する範囲では、いくつかのやや危険な表現が見受けられるものの（「押韻は押韻し合う単位のあいだの意味上の関係を必然的に包含する」という「押韻の有意味性」の命題が「意味上の近接性、イメージを作り上げる類似」と捉えられたり、あるいは「詩においては、音韻連鎖だけでなく意味単位の連鎖もまた同じように等価関係を形成する傾向をもつ。……連鎖上の要素はすべて直喩である」とされたりする）、等価性はすぐにもとの中立性を回復する（「音の等価性は構成原理として序列の上に投影されると、不可避的に意味の等価性を含み、連鎖のこのような構成要素は、言語のいかなる面においても……《類似性のための比較》と《非類似性のための比較》という二つの相関的経験のいずれかを促す」、「音の顕著な類似はすべて、意味の類似および／あるいは相違との関連において評価される」¹³⁾）。結局ヤコブソンが問題とするのは、シニフィアンどろしの類似性とシニフィエどろしの類似性の相関的な対応なのである。

しかしここには、もう一つの、より重要なすり替えないし混同、あるいは「神話的」(mythologique)な移行があることを我々は明確にしておかねばならない。それは、今度は「類似性」という語をめぐる混同であり、範列的等価性から、さきのジュネットの「垂直的等価性」という術語にあらわれているような音と意味の有縁性への移行である。「類似性が隣接性の上に投影される詩においては、換喩はすべていくらか隠喩的であり、隠喩はすべてどこかしら換喩的である」¹⁴⁾というまことに美しいがその本当に意味するところはなかなか捉え難く、いずれにしても我々の文学的思考にとってきわめて示唆的なヤコブソンの定式を可能にしているのは、「類似性」という概念に込められたこの「垂直的等価性」すなわち「音と意味との内的連関」であろう。ヤコブソン

の詩的言語が「真に立体的な三次元の象徴空間」であるためにはシニフィアンとシニフィエの「越えがたい溝」を埋めることが不可欠であり、論文「言語学と詩学」では、その暗黙の要請にしたがって、論文の終わり近くで音象徴性の理論が突然のように導入されることになるのである。

しかしその導入にあたってヤーコブソンが「音一意味の連結の関与性は、類似性の隣接性への重ね合わせの純然たる派生的帰結である」¹⁵⁾としていることは重要である。ジュネットは「おそらくその逆も言える」としているが、音象徴性の議論をもち込む際にヤーコブソンがあえて付したこの但し書きは、「今日でもなおすべての〈現代〉詩学者たちの胸中にくすぶりつづけている」「きわめて強烈な形式主義的・慣習主義的立場とミメーシスに価値を認めるいわば遺伝的な反射運動」とのあいだの「未解決の矛盾」¹⁶⁾を考える上で、きわめて示唆的であると思われるのである。

上の定式において明らかであるのは、「純然たる派生的帰結」(un simple corollaire)ということばによって示されているとおり、言語の有縁性が《そこからすべてが帰結する》根源的な真理ではなく、言語が成り立たせる(あるいは言語という)重層的な諸関係の綱目によって生み出されるものとして捉られていることである。このきわめて構造主義的な有縁性の考え方は、それまでの言語模倣理論から、確実に大きな一歩を踏み出すものである。すでにお気づきになられたことと思うが、このいわば構造主義的ミモロジスムはヴァレリーにもその兆候が見られるものであり、我々は、ヴァレリーとヤーコブソンの詩的言語論を材料に、その革新を以下により詳しく考察してみることにしよう。

さて上の定式を可能にしているものとして特徴的であるのは、有縁性を、形式のレベルの関係と意味のレベルの関係との相同的な対応と見做す視点である。これはまさにヤーコブソンが好んで強調する図表の関係にほかならないが¹⁷⁾、この考え方は実はすでにヴァレリーにおいても現われていた。詩的状態が生み出す「宇宙の感覚」についての、以下に示すかなり難解な説明は、我々の思考と言語、言語とその意味作用の関係を、そして我々に知覚される限りでのさまざまな存在の様態が、言語の詩的状态という一種の奇跡を通じて、それぞれが一つの関係の体系を成しながらも互いに結び合うという相同的(ヴァレリーの言葉で言えば「調和的」)な対応関係を指しているものと思われる。

詩的状态ないし詩的感動は、次第に生じてくる一知覚のうちに成立するもの、

世界すなわち完全な体系を知覚しようとする傾向のうちに成立するものと私には思われる。その体系においては、もろもろの存在、事物、出来事、行為が、それらが借りて来られた感覚の世界すなわち直接的な世界を満たし構成しているものに、各々が各々に類似しているにせよ、他方では、それらは我々の感覚能力全般の様態および法則と、定義することはできないが驚くほど正しい関係を結ぶ。そのときこれらの既知の存在および事物は言わば価値を変える。それらは互いに呼び合い、通常の条件下とはまったく違った仕方につながり合う。それらは(……)音楽化され共約性をもつようになり、互いによって互いを響かせ合う¹⁹⁾。

音と意味の分離不可能な(いわば「絶対的な事物の印象を与える」ような)つながりは、この相同的な対応関係の「派生的帰結」なのである。このように見てくると、形式主義は一概に慣習主義的価値論とばかり結びつくとは言えず、実は実体的ミモロジスムが構造主義的(関係論的)ミモロジスムに変貌するための不可欠な誘導原理であったと考えられるのである。

さてこの関係論的な考え方は、「ことば」と「もの」のあいだに模倣関係を認める従来の言語模倣説ないし反映の理論(「ことばはものの観念ないし意味を反映する」)と完全に訣別する。詩が「〈声〉と〈思考〉のあいだを揺れる振り子」であり音と意味のあいだの「いつまでもつづく」(prolongé)ためらいであるのは、〈声〉と〈思考〉、音と意味とが独立した存在ではなく相互に影響を及ぼし合い、互いを改変し合う共起的な存在であるからで、「音と意味の不分離性」とはまさにこの意味にほかならない。ここで、詩的言語理論に共存する二つの矛盾する原理と単に見做されていた形式主義的主張と有縁性の主張とが、実は密接なかかわりをもっていったことが明らかとなる。形式の自律性の主張は、それまで形式を隷属状態に置いていた「意味」をいったん捨象することによって、有縁性の領域を「形式」と「意味」から「形式」と「意味作用」へ、すなわち言語による意味の産出という考え方の方へ移行させるのである。この意味で、ヤーコブソンが詩を詩たらしめる詩的機能(詩性)について、形式の自律性を強調しながらも次のように述べていることはまこと示唆的である。

だが、詩性とはどのようにあらわれるのだろうか。それは語が、名指される対象の単なる代替物や感情の爆発としてではなく、語として感じ取られるという点においてである。語とその統辞構造、その意味作用、その外的・内的

形式といったもの自体が、現実の中立的な指標ではなくて、固有の重みと固有の意味とを有するという点においてである¹⁹⁾。〔強調拙筆者〕

ヤーコブソンが警戒するのは「概念と記号の関係が自動化」することであり、詩的言語はそうして「化石」化してゆく言語に新たな生命を付与し、現実に対する新たな意識を促して、新たな意味関係を可能にするというわけである。この言語の《発見的な有縁性》（あるいは《擬似模倣性》）とでも言うべきものが、ヤーコブソンにおける言語の模倣性と知覚可能性の結びつきに関する矛盾を解釈する鍵にもなると思われる。さきにもう一つの二律背反として見たように、日常言語において模倣性が大きいと知覚可能性が少ないとされ、詩的言語においては模倣性が知覚可能性に貢献するとされたのは、前者においては模倣性は外部から与えられた受動的で非発見的なものであるのに対して、後者においては模倣性は発見的でありまさに言語の創造力のあらわれだからである。

ジュネットは『ミモロジック』の末尾で、言語の恣意性の議論を科学の側に（「言語の恣意性は言語学の基礎を支える立場であり、したがって必然的にいわば言語学の職業的イデオロギーのようなものである」²⁰⁾、そして有縁性の議論を快楽の側に位置づけ、ミモロジスムの言説の「美的な味わい」ないしは「文学性」を強調している（「二十世紀のあいだにわたって《合理的な理論》を展開させてきたヘルモゲネス〔主義〕は、その間なんら魅惑的なものを生み出してこなかった（……）。それに対してクラテュロス〔主義〕は我々に、生彩に富み、興趣に溢れ、ときに我々の心を騒がせる一連の著作を残している」²¹⁾。彼はクラテュロスのテクストに「詩的生産性としてのミモロジスム」を見出し、その魅力について次のように述べている。「その魅力は、実は少しも模倣の自明性に拠るものではなく（……）、反対に、その場その場で、それまでは切り離されていたある形式とある意味とを引き合わせる驚きに由来している」「思いがけないしかし絶妙の結び合わせである個々の成功したミモロジスムは、真の創造活動であり、言い換えれば同時に発明であり発見であるものなのだ」²²⁾。このように文学的創造力の一形態となることによってミモロジスムは、「芸術の一つ、もっと言えば一つの文学ジャンル」にまで昇格する力を得る。

II

以上のようにミモロジスムはさまざまな二律背反の交錯する場なのであるが、ここで我々はジュネット自身の詩的言語観の中でミモロジスムが生じさせてきた二律背反について、『ミモロジック』以前の批評的著作を材料に検討することにした。

ジュネットが自ら確認しているように、詩的言語の特性を研究するという構想は『ミモロジック』のはるか以前から彼の裡にあったものである。そしてそれはマラルメを通じて、早くから《詩による有縁性の回復》というテーマとして考えられていた（「詩的機能は、たとえ錯覚であるとしても、記号の恣意性を《埋め合わせる》という努力、すなわち言語を有縁化する努力の中にこそある」²³⁾）。ジュネットは『ミモロジック』を書きあげるまでのさまざまなクラテュロスのテクストの研究が、「ほぼコンスタントに二種類の反応に支えられてきた」ことを語っているが（「私は一方において、それらのテクストに大いに魅了された……、と同時に、もう一方でそれらを知的には容認できないと思ったわけです」²⁴⁾）、このようなミモロジスムに対する、単純に言ってしまえば肯定的と否定的の二種類の反応は、実はジュネットをその詩学者・批評家としての出発以来支えてきた、彼の主要な問題系に対応する態度だと思われる。

ミモロジスム（というかよりの確にはクラテュロス主義）の否定は、形式主義者・構造主義者ジュネットにとっていわば当然すぎる反応であり、これは言うまでもなくシニフィアンとシニフィエの根源的な分離の認識にもとづいている。しかしそればかりでなく、言語の有縁性・模倣性の議論は、ジュネットが明らかにする、二つの文学（的思考）上の欺瞞に結びついたものである点において否定すべきものなのだ。その欺瞞の一つは「現実主義的錯覚」（*Pillusion réaliste*）である（「記号の有縁性とりわけ《語》のそれは、言語の意識における典型的な現実主義的錯覚である」²⁵⁾）。これは論文「文学ありのまま」で文学の一般理論を構築する際の障害として、いま一つの暗黙の慣習である「作者の錯覚」とともに言及されたものであり（我々にとって今ではいささか陳腐とはなったが）、その後も彼が警戒を怠らない項目である。文学は現実を表象するものではないし、また逆に現実を送り返されるべきものでもないという主張は、そのまま言語記号にも当てはまる。ことばと「もの」の模倣関係のヴィジョンは言語の次元と現実の次元の素朴な混同に由来するものであり、ミッシェル・

シャルルの言うように²⁶⁵、このように「まずく提起されてきた」ミモロジスム（それがクラテュロス主義であった）をずらして、そこに含まれていた「《現実主義的で実体論的な》態度を放棄する」ことをジュネットの著作は目指してきたと考えられる。

もう一つの欺瞞というか陥穽は「象徴主義的錯覚」とも呼ばれるもので、要するにあらゆる関係を類比的関係に還元してしまう傾向を指す。これはとりわけ、レトリック（弁論術／修辞学）が隠喩の学アナロジーに還元され、隠喩の絶対的価値づけが確立されてゆく過程を扱った論文「限定された修辞学」の主題であるが、その中でジュネットは、認識のこうした傾向が、ミモロジスムの発想の基盤をなしていることを、次のように指摘している。

記号の錯覚上の有縁化は、とりわけ類比主義による有縁化である。そこですすんでこのように言うことができよう。何らかの意味関係を前にしたときに精神が最初に示す動きは、それを類比的なものに見做すことである。たとえそれがまったく別の性質のものであったとしても、またたとえば言語的記号現象においてはしばしばそうであるように、それが純粹に《恣意的な》関係であったとしてもである、と。語の物に対する類似という自然発生的な信念がここから生まれ出る。そのあらわれが永遠のクラテュロス主義であるが、これがつねに詩的言語のイデオロギーないしはその《土着理論》として機能してきたのである²⁷⁰。

ジュネットは『ミモロジック』において、この類比性の呪縛がこれまでいかに強くミモロジストたちのもとで働いてきたかを検証している（歴史上のミモロジストたちに対して決定的な距離をジュネットにとらせるものは、この類比性の錯覚の意識化であるように思われる）。だがさらにその一方で真の（？）ミモロジスムは類比を超克するものであることを彼は主張あるいは期待している（「成功したミモロジスム」は「類似性の不毛な——無力な——美学に対する、実行による否認であり内在的な反駁である」）²⁶⁹。

ジュネットにとってミモロジスムは、以上のように意識化し警戒し止揚すべきいわば文学的（言語論的）「神話」である一方、早くから（『フィギュール』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲといった著作において）もう一方で文学的な創造性・生産性を秘めたものと捉えられていたように思われる。そのようなミモロジスムの考え方は、逆説的にも、まず言語の恣意性という基礎に立脚するものであり、シニフィア

ンとシニフィエの根源的な分離を第一の前提としている。jour (昼) や nuit (夜) といった語は、派生語や複合語ではないために、すなわち「不透明」であるからこそ、あらゆる知的・分析的な有縁化をまぬがれ、それゆえにより具体性を帯びるようになり、感覚的な想像力の夢想に対して一層開かれたものになる²⁹⁾という議論には、恣意性の原理の生産的ミモロジスムへの昇華の動きを読み取ることができるだろう。

この生産的想像力としてのミモロジスムの考え方は、ジュネット固有の^{フイグユール}文彩の考え方と結びついて生じてきたものと思われる。たとえば彼は早い時期に次のように述べている。

帆を指すのに帆という語を用いる場合は意味作用は完全に恣意的であるが、この帆という語を船を指すのに用いるならば、意味作用は有縁化されたものになる。この有縁性こそ^{フイグユール}文彩の魂そのものである³⁰⁾。

さらに詩的言語の有縁性の問題に着手した論文「詩的言語、言語の詩学」では、^{フイグユール}文彩=比喩と有縁性の関係について次のように述べている。

比喩的な^{ことば}辞項は本質的に有縁的である。それも二つの意味で有縁的である。まずまったく単純に、それが言語によって強制されたものではなく選択されたものであるという理由によって。そして次に、辞項の置換は常に二つのシニフィエのあいだの何らかの関係から生じるものであり、この関係は〔意味を〕ずらされ置き換わったシニフィアンの中にも(共示的に)残っていて、それゆえ置き換わったこのシニフィアンは、排除された方の辞項と同様に一般にその字義どおりの意味においてはやはり恣意的であるにもかかわらず、比喩的な意味においては有縁的となる、という理由によって。(……)愛を指すのに炎と言うことは、言語を有縁化することであり、それによって言語に厚みを、起伏を、存在の重みを与えることである……³¹⁾

ここに明らかなように、比喩的な辞項の有縁性(第二の意味での)はシニフィエどうしおよびシニフィアンどうしの関係から生じるものである。このような相同的な照応関係は、ジュネットの出発点であったバロック詩の特徴でもあった。ことばとものの垂直的な照応関係を打ち立てる象徴主義の詩からバロック詩を分かつのは、「平行的な文彩として、語と語を結合させ、ということはつ

まり対立させ、そしてそれらを通じて、物と物とを結合・対立させる横の関係に対する信頼」であり「語と物との関係は相同的」にしか働かない³²⁾。ここで我々はミモロジスムの問題がジュネットにとっていかに核心的なテーマであったかを感じることができる。ジュネットは初期のテクストの中で、「隠喩」は「切り離されていた二つの感覚を引き合わせることによって、類比の奇跡を通じて共通の本質を引き出すことを可能にする」³³⁾と述べている。この文章と、さきに紹介した、発見としてのミモロジスムについて述べた『ミモロジック』の終末部の文章（ミモロジスムは「それまでは切り離されていたある形式とある意味とを引き合わせる驚きに由来している」。それは「真の創造活動」であり「同時に発見であり発見である」）とのあいだには驚くべき類似があり、隠喩とミモロジスムがジュネットのもとでは、言語の同一の働き（それはまさに言語を「変革する」働きである）を表象するものであったことが推論される。我々の目にも——たとえばクロードの locomotive のように³⁴⁾——、成功したミモロジスムのもつ隠喩の能力は、歴然たる事実であるように見える。

以上にみてきたように、ジュネットにとってミモロジスムは、言語活動の発見の力、創造の力、要するにその生産性の最も模範的なあらわれであり、文学の文学性の鍵である。その都度更新されるべき、本来的につかの間の存在であることを宿命づけられている、そしてそれ自体が危うい逆説の上に立つミモロジスムは、これもまたすぐれて、同一性と差異、不在と現前のあいだを揺れるあのフィギュールのめまいを引き起こすものにはかならない。

注

ジュネット (Gérard Genette) の著作については以下の略号を用いる。

F I: *Figures I*, Seuil, 1966.

F II: *Figures II*, Seuil, 1969.

F III: *Figures III*, Seuil, 1972.

M: *Mimologiques: Voyage en Cratylie*, Seuil, 1976.

- 1) 拙論文「言語の恣意性？有縁性？——『ミモロジック』を契機として」、筑波大学文芸言語学系『文藝言語研究』14号、1988年、所収。
- 2) M, p. 120.
- 3) G. Genette: 《Avatars du Cratylisme II: L'idéogramme généralisé》, *Poétique* 13, 1973, p. 133. この論文は若干の変更を施した上で『ミモロジック』に再録されたが、その際にこの表現は削除されている。
- 4) Mallarmé: *Œuvres complètes*, coll. Pléiade, Gallimard, 1945, p. 521.
- 5) *Ibid.*, p. 364.

- 6) *Ibid.*, p. 921.
- 7) Valéry: *Œuvres I*, coll. Pléiade, Gallimard, 1957, p. 1328, 648; *Œuvres II*, coll. Pléiade, Gallimard, 1960, p. 551.
- 8) Jakobson: *Essais de linguistique générale*, Minuit 1963, p. 218.
- 9) *Ibid.*, p. 241; Jakobson: «A la recherche de l'essence du langage», in *Problèmes du langage*, Gallimard, 1966, p. 35.
- 10) Jakobson: *Questions de Poétique*, Seuil, 1973, p. 148.
- 11) *Ibid.*, p. 14.
- 12) *M*, p. 312.
- 13) Jakobson: *Essais*, p. 233-234, 238, 235-236, 240.
- 14) *Ibid.*, p. 238.
- 15) *Ibid.*, p. 241.
- 16) *M*, p. 295.
- 17) 「言語学と詩学」の末部でヤーコブソンが展開する音象徴性の擁護は、決して単独の音とその共感的な喚起力を主張するものではなく、たとえば i と u という音素の対立が、高音調性／低音調性という対立として感じとられるという関係論的な照応にもとづくものあった (cf. Jakobson: *Essais*, p. 241-244)。
- 18) Valéry, *Œuvres I*, p. 1363.
- 19) Jakobson: *Questions*, p. 124.
- 20) *M*, p. 424-425.
- 21) *M*, p. 426.
- 22) *M*, p. 427.
- 23) *F II*, p. 145.
- 24) 「ポエティックの過去と現在」(インタビュー), 花輪光監修『フィギュールⅢ』書肆風の薔薇, 1987年, 所収, p. 198.
- 25) *F II*, p. 96.
- 26) Michel Charles: *Rhétorique de la lecture*, Seuil, 1977, p. 94.
- 27) *F III*, p. 39.
- 28) *M*, p. 427.
- 29) *F II*, p. 11.
- 30) *F I*, p. 239.
- 31) *F II*, p. 148-149.
- 32) *F I*, p. 36-37.
- 33) *F I*, p. 40.
- 34) 「l は煙突, o は車輪とボイラー, m はピストン, t は速度の証拠(……)ないしは連結椎, v は転轍てこ, i は汽笛, e は車両連結の輪, そして下線はレールである」(*M*, p. 343)。